

おとなりまくら

ひゅうひゅう、って風の音。

びゅうびゅう、って風の音。

びゅうびゅう、って風の音。

だんだん強くなっていく音の中で、わたしは金づちにぎってた。

トントン、トントン

隙間を見つけて、板を張って、釘を打って。

「こんなに壊れてたなんて、知らなかったわ」
いろいろあつて、あまり気にかげられなかったものね。ああ、これじゃ飼い主失格よ。

ちよっと下向いちゃったら、いきなり肩が重くなつた。でも、何なのかなんて、匂いだけでわかるわ。

「忠太郎、じゃましないの。あなたのおうちを直してるのよ?」

右肩に頭を乗せたまま、大きな口を開いてあくび。頭のいい子なのだけど、甘えんぼねえ。

「もう、金づちに当たっても知らないわよ?」

そう言っても、ちらっと片目開けただけ。肩ののんびりしちゃって、おりそうもないわね。また直し始めましょ。

隙間はうまつたみたいだから、あとは飛ばないよ
うに、ロープで地面に固定して、と と? とと
と、と??

「こら! いたずらしちゃダメでしょ?」

小屋がだんだん遠ざかってく。カーディガンの首が引つ張られてるんだわ。

「忠太郎! ちよつとやめ」

「『もういいから、中に入れ』って言ってんじやない?」

あら? この声 ?

「ほのかのこと、心配なんだよ。いいヤツじゃん、忠太郎」

振り向いたら、なぎさが立ってた。スポーツバッグを肩からかけて　　って

「きゃー！」

つい気が抜けたら忠太郎に引っぱられて、そのまま後ろに、倒れるっ！

ぼぶっ

体を硬くしてたら、いきなりやわらかいものに包まれたわ。

目を開けると、いつぱいの笑顔。

「じゃ、ひと晩よろしくね♡」

「よいっ、せー！」

廊下の端に雨戸を押し付けて。よし、一枚おわりっ

と。まだ夕方なのに、空はまっ黒だな。さて、次いこっか。

次の雨戸を出しに庭を歩きながら、あたしはちょっと前のことを思い出してた。

はじめは、いつものおしゃべりだったんだよね。商店街のくじ引きで温泉旅行が当たったから、おばあちゃんに行ってもらったって。ほのか、嬉しそうにしてたな。

それが、次の日になって深刻な顔であたしに言うんだもん。『次の土曜、泊まりに来て！』って。なにかと思ったら、おばあちゃんが心配して行ってくれないから、だって。

そのときは思わずぼかーん、としちゃったけど、ここに来ると納得するよ。こんなに広い庭、広い家に、ほのかひとり置いてけないよね

ばらばらばら

雨戸を片っ端から閉めまくっていた途中で、硬い音が響いた。

「ああ、降ってきちゃったか」

まあ、当たり前なだけだね、台風来てるんだし。それでも犬小屋の修理が先、っていうのが、ほのからしいとこだよな。

ばらばらばら

いつけない。風に乗って、雨粒が痛いくらい吹き込んできちゃってるよ。

「さあ、さつさとやんなきゃね」

あたしは手を叩いて気合い入れた。実際、気合いいるんだわ、これが。長い廊下の端から端まで、ぜんぶに雨戸通さなきゃいけないんだから

「ワフ！」

長い廊下見てうんざりしてたところで、いきなり背中から吠えられた。いつの間にか、忠太郎があたしの足元にいる。

「あれ？ あんたも手伝つもの？」

あたしがそう言ったとたん、忠太郎が廊下に行った。閉めかけの雨戸の端っこくわえて

え!?

ガラガラガラッ

う、うそ。雨戸が閉まってくっ!?

雨戸くわえた忠太郎が、そのまんま廊下を走ってるんだ。さ、さすがほのかん家の犬だよ。あ、

戻ってきた。

「すっごいね、忠太郎。えらいえらい」

頭なでてあげようとしたら、あたし見上げて

首を横に振ってるよ。だめだこりゃ、って感じに。

「な、なつまいきいっ!!」

思わずごぶし握ったあたし無視して、また雨戸に突撃してく。あたしも走った。もう気合いなんて言う場合じゃない。犬に負けてたまるかあっ!!

「で、そんなに濡れちゃったわけ？」

「雨戸閉め終わって家の中に入ったときには、あたしの重さは倍ぐらいになってた。」

「忠太郎はいつの間にかいなくなっちゃってるし。目の前のほのかは、あきれた顔して立ってるし。あゝあゝ。」

「とりあえず、タオルね。それで」

「かけられたタオルで頭拭いてたら、ほのかの声がちよつと変わった。」

「お風呂にする？」「はんにする？」

「なんか鼻にかかって、そう、艶つばい？」

「それとも ふもっ!？」

「それ以上言つと、ぐーでぶつからね」

「あたしはとつさに、手のひらでほのかの口おさえてた。」

「まったく。なに言い出すかと思えば」

「ふむむ ふう。なあに、なぎさ？ 服が濡れちゃっ

「だから、お洗濯先にしようかと思つたのに、そんなに苦手？」

「へ？ 洗濯？」

「思わず顔が熱くなつてきた。ああ、なんて想像してんのよ、あたしったら！」

「うふふ」

「あ、ちがう。わざとやってるな、こいつはっ！」

「ほのゝかあゝととと！」

「下からジト目で見上げてたあたしの顔に、なにか乗つてきた。手に取って見てみたら、またタオルに 着替え？」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

「それじゃ、ごゆっくり♡」

る気がしないなあ。

ほのかン家のお風呂、ひとつじゃないんだよね。どうせだから、って大きな方を教えてもらっただけどあぁ、ここが。

ガラス、と戸を開けたら、目の前に体重計。その向こうに三段の棚があって、脱衣かごがいくつか、って、ねえ。お風呂も木でできてる、って言っし、ちよつとした旅館気分だよね。

ほのかのおばあちゃん、温泉で楽しんでるかな？家がこれじゃ、普通の温泉くらいじゃ満足できないかも——

そんなこと考えながら服脱いで、あたしはお風呂場のとびら開けた。

「ウオンッ！」

うえ!? なに、この声??

「ワフ」

下の方から って、忠太郎？

あ、そういえば、ほのかが言ってたっけ。たまにお風呂から上がると忠太郎が見てるんだ、って。

「洗ってほしいの？」

しゃがんで手を出してみるけど、そのまんまじつと見てる。タオル巻いたあたしの 胸のあたり？

「クウ〜ン」

あれれ？ 何度か首を振って、はぁ、ってため息ついてる？

ぼん

あたしの肩に前足置いて、あたしの目を見る。なんだか悲しそうな、申し訳なさそうな目で——ちよな、なっつ

「犬になぐさめられたくな〜いっ!!」

「ふ〜っ」

そんなに疲れてるわけでもないのに、足を伸ばして肩までつかると声が出ちゃう。やっぱり、お風呂は広いほうがいいなあ。

忠太郎は、あのままお風呂出てっちゃった。とびら閉めて出てったからびっくりしたけど、あとでよく見たら、下の方にくわえやすいでっぱりがあったんだ。お風呂場の端っこには、浅めの浴槽にペダル式のシャワーもあるし。忠太郎って、割と世話のからない犬なんだなあ。

ひよつとして、ほのかの負担になりたくないのかな？

ふっ、とそんなことが浮かんで、あたしは思わず頭振った。バカな話だよな。犬がそんなこと考えるはずないのに――

「なぎさ、お湯かげんどう？」

考えてたらいきなり声が出た。脱衣所の方に、ほのかの影が見える。

「ん、だいじょぶだよ」

って言うてから、あつ、と思った。ひよつとして！
「ごめん、入りすぎてた？ すぐ上がって手伝つから」
気持ちよくてぼーっとしてたからなあ。いつの間にか時間たっちゃったかも。

「ゆっくりしていいわよ。そうだ。わたしが洗ってあげる。ちよつと待ってて」

そう聞こえてから、すりガラスの向こうでこそそそやりはじめた。ワンピース脱いで、くつ下脱いでつて、ちよつと待った！

「ちよつとほのか、なんで下着脱いでんのよー！」

「脱がなくちゃお風呂入れないでしょ？ なあに？ そんなにじつと見つめてるの？」

言われて思わず顔が熱くなっちゃった。でも、目が脱衣所から離れないよ。

部活じゃみんなでシャワー浴びたりもしてるし、いっしょにお風呂なんて気にもならないはずなんだけど、でも、ちよつと

「お待たせ♡」

すりガラスのとびらがガラツと開いて、出てきたのは

「ええっ!?!」

水着のほのかだった。

「え? あれ? だって、下着脱いで ええっ??」

「ふふふ、もちろん。その下に着てたの」

ああ、もう、よく見たら水着もうすいピンクだよ。これじゃガラス越したと肌に見えるよ。まったくっ!!

「なぎさだったら、もう、いくら女の子どつしでも、はだかで仁王立ちされたら困っちゃうじゃない」

手のひら広げたまま顔かくしてるほのか見て、はっ、とした。あたし、思わず、立ち上がっちゃってたんだ。

「ほお〜のお〜かあああ〜っっ!!」

「きやあ〜、逃げろあ〜っっ♡」

着替えは淡いグリーンの、ゆるいワンピース。さらさら生地きじが歩くたびにふわふわゆれて、着てないより涼しいな。

お風呂場を出て廊下を歩きながら、あたしはぼーっと考えてた。

「今日のほのか、テンション高いなあ」

思わず口に出ちゃったけど、なんか、ね。自分の家だから、つてもあるんだろうけどさ、前に来たときには、こんなじゃなかったはずんだけどなあ。

「別に、無理してる、ってわけでもないし」

うん。ただ、テンション高いだけなんだよ。なんだろなあ? 台風が近づくと、ハイになるとか?

「あ、なぎさあ、ちょっと手伝ってくれらう?」

廊下の突き当たりを曲がろうとしたところまで、ちよつと奥の方から声がした。覗き込んだら、とびらの向こうに流し台が見える。ああ、あそこが台所なんだ。

「おっけー ん?。」

中に入ったら、ほのかが待ってた。エプロン姿の。ってゆーか、その ええっ!?

ほのかの着てるのって、エプロンだけ。これって、まさか、は、はだ、はだ!! いやいや。なぎさ、騙されちゃだめよ。さっきだって水着だったじゃない。おちついて、おちついて――

「ほ、ほのか? そのエプロンってさ」

つい上ずっちゃう声を何とかおさえて、と。そうそう、あたしの反応見て楽しんでんだから。さりげなく、さりげなく、ね。

「ん? ええ、さーびす♡」

サービス、ったって あーっ、騙されるな、なぎさー!

「へ、へえ、そうなんだ。そ、それよりさ、ほのか。あたしは何を手伝えは っ、っ、っええっ!?!」

エプロン、ちよっとづつ持ち上げてる!?! 白くて長い足が、すこしづつ、すこしづつ !!

「う、うわあっ! そ、そーいうのは、好きな男の子に っ、違っ! それもダメえっ!」

エプロンから手を離れた、と思ったら、すそがふわっ、と浮いた。ほのかがくるっ

「こらあっ! 後ろ向くなあっ!!」

っ、あれ?

「ちゃんと着てる?」

「なに言ってるの? へんななぎさ」

ノースリーブの肩ひもの上にエプロンのひも乗せて。ミニスカートのすそを、ちよっと足にはさんで。ちよっと全部エプロンで隠れるように着て――ああ、もっありえないっ!

「もあーっ! いいかげんにしないと、ホントに脱がすわよっ!!」

「ふふ それじゃ、お風呂でからだきれいにしてくなくちゃ♡」

だあゝかあゝらああゝっ!!

「こらあっ! むべっ!?!」

大きく口開けたところに入ってきたの、菜箸さいばし!?

「はいはい。わたしの代わりにおイモひとつ、召し上がれ」

口の中に放り込まれたおイモ、食べてたら、ほのかのエプロン姿があんまり気にならなくなってきた。色気より食い気、ね。われながら、ちょっと情けない気がするなあ。でも、このおイモ、なんだか? 「ほのか、このおイモ、味薄くない?」

言ったとたん、ほのかの手が動いた。なべで煮たおイモをひとつ、小さな片手なべに移して、ぱっぱと味付け直してる。

「なぎさは濃いめが好きなのね。それじゃ、これでも?」

あたしの前に出てくるまで、一分もかかってない。さっすが、手馴れてるね。

それじゃ、遠慮なく。あむ うん、さっきよりは濃いけど。

「ん、だいぶよくなったけど、まだちょっと薄いかな?」

っていつか、そもそも味付けが上品なのかもね。薄い、なんて言っちゃ悪かったかな ?

「え、これで? 辛すぎるはずよ!」

でも、返ってきたのはホントにびっくりした顔だった。っていつか、またイタズラしかけてたわね。

ほのか。

「あ、ひよっとして。なぎさ、舌出してみて?」

こいつ、ごまかして ないな。心配そうな顔だわ。はあ、しかたない。とりあえず、ペーっと。

「ああ、やっぱり。ちょっと舌苔できちゃってるわ。もう、チョコの食べすぎよあ。

ほら、舌ブラシでとってあげるから。ペーっ、てして?」

また舌を出して? じゃ、ペーっ。

「もつと思いつきり」

ん〜、これじゃ足りないのか。よあし。べえーっ。

「あん。これじゃ、奥まで取れないわよ。そつね、目をぎゅっとなつむって、その勢いで出してみて」

へえ、そんなに舌が出るんだ。それじゃ、せえ、の！

あ、鼻のあたりに息がかかっている。舌にブラシがさわって　ちよつと待って。ずいぶんやわらかいよ、このブラシ？

「ん。やつぱり、ちよつとチヨク味ね」

ばっ、と目を開けたら、すぐ前にほのかの顔があった。

「　ほのかちゃあ〜ん？　怒らないから、いまにしたら言ってみてくれるう？」

「ん？　したでしたを　　しただけ♡」

「ごまかすなあ〜っ!!」

ほのかったら、もう。とこつとんあたしで遊ぶ気ね？　さあ、どうしてくれよう

「オン！」

あ、え？

ほえ声といっしょに、足元がもこもこした。あたしとほのかの間に、忠太郎が割り込んできてるわ。

「はいはい、忠太郎もね？　じゃ、舌出して」
いきなり、ほのかがしゃがんだ。何だろ？　って思いながら見てたら、忠太郎が出した長い舌に、ぺろっ、

て!!

「うん。いつもと同じ。大丈夫よ」

そのまま、忠太郎の頭なでてやってるよ。普通に、何もなかったみたいに。

え、っど？

「あ、あのー　ほのか？」

「うん？」

「いまのつて、いつたい　？」

ほのか、ちよつと考えてたけど、ぽん、って手を打った。

「ああ、これ？　舌で体調みてるのよ」

「舌あ?」

思わず口おさえちゃうくらい、変な声出しちゃったじゃない。

「そ。忠太郎が赤ちゃんの頃にね、なめっこして遊んでて気がついたの。」

調子悪くなる前にね、舌がすこしはれちゃうのよ。指でさわってもわからないくらい、だけど」

そっか、遊んでるんじゃないかって、ちゃんと飼い主してるんだ。あ、それじゃ、あたしも?

「ひよつとして、さっきのって、あたしの体調みてた、とか?」

そつだよね。なんだかんだ言っても、ほのかって真面目なんだもん。ただあたしで遊んでただけじゃ

「ううん、なぎさの一度なめてみたかった、だ。け」

口に入さし指ちよん、って当てる、片目つむって見せてる。あゝっ! もうっ!!

「さ、それじゃ、ごはんにしましょう。隣の部屋に運

んでね」

あたしは思わずどなっちゃうかと思ってやめた。コン口に向き直る瞬間、小さなつぶやきが聞こえちゃったから。

『なぎさの体調も、これでわかればいいのにね——』
つて。

「ごちそうさま」

居間の低いテーブルの上、いっばいの食器が空っぽになっちゃった。

うん、おいしかった。別に豪華とかじゃなくて、普通の料理なんだけどね。でも、それがかえってほのかっぱいよ。

「おそまつさまでした」

ほのかが笑って食器重ねてる。ただのあいさつだけど、謙遜もいいとこだよ。よく知らない子が言っ

たんなら、嫌味かと思っっちゃうかも。

「オン！」

となりで忠太郎が軽くほえた。テーブルのそばで、一緒にごはん食べてたんだよね。あ、食器くわえて台所に歩いてくよ。あたしも食器持つてついてこっか。

食器——忠太郎のも——を洗って居間に戻ってきたら、テーブルの上にひとつだけ食器が残ってた。タクアンの炒め物かあ、ピリツとしてて、ごはん食べ過ぎちゃいそうだったなあ。

「これお父さんが見たら、ちよつとビールでも、とか言いそうだな」

「お酒？ あるわよ」

ひとりごとだったんだけど、あとから来たほのか、聞いてみたい。

「おはあちゃまが、眠れないときに飲んでるの。——はい。梅酒に、ワインに、焼酎に」

え？ ちよ、ちよつとほのか？

「飲んでんの!？」

「うっん、飲ませてはもらえないけど、香りだけ。はじめてだけど、今日は飲んじゃおうかな〜って」

なんか、イヤな予感するよ。こういうときはあ、そうだ。

「忠太郎、ちよつと」

あたしがこそつ、と呼んだら、

「ワウ？」

ちよちやくほえ返しながら近寄ってきた。

「このお酒って、ほのかに飲まして大丈夫？」

よく考えたらバカみたいだね。でも、そのときあたしは普通に訊いてた。

忠太郎、じつと考え込んでから、長い尻尾の一撃で、梅酒以外みんな蹴倒しちゃった。やっぱり、ね。

「梅酒だったら飲んででもいいってさ」

「『いいってさ』って、だれに訊いたの？」

きよとん、としているほのかに手を振ってこまかしながら、あたしは蹴倒された他のお酒を片付けた。

さすが忠太郎だよ。ほのかのこと、よく知ってるわ。

すう、すう

となりから、気持ちよさそうな寝息が聞こえる。なんとなくイヤな予感がしたんで、無理言って先にふとん敷いといたの、正解だったよ。

それにしても、梅酒ひと口ですーぐ寝ちゃうんだもんねえ。ほかのお酒なんか飲ましてたらどうなってたか。ほんと、あらためて感心しちゃうよ、忠太郎。

ん、ううん

ころん、って寝返りうってるのを、忠太郎があたしと一緒に寝ながらめめた。ほのかの枕もとで、ふせながらじいっと見てるんだ。

外は台風通過中。大粒の雨が雨戸に当たって、ドラムみたいなき音してる。けど、こうして見てるだけ

で、何にも気にならないや。

「かゝわいいもんねえ」

忠太郎、あたしの顔をちらっと見てから、ふんっ、って鼻鳴らせた。見るな、って言ってるのかな？

でも、独り占めはさせないよ。

「えい」

羽根まくらから、羽根がちよつと出てる。あたしはそれを引っ張り出して、ほのかの鼻のあたり、こちよこちよ

「つくしゅー！」

ああ、くしゃみしてる、くしゃみしてる。

あたり前なんだけどね。でも、それをただ見るだけで、楽しい♡

「よーし、もう一回」

「ワフ」

あれ？ 忠太郎があたしの目の前に来て、顔をじつと見てるよ。

「やめろって？ いじめてるわけじゃないのよ？」

あれ、忠太郎がほのかの顔におしりむけたしっぽでつんつん、って。

「つくしゅー！つくしゅつー！」

お手本、ってわけ？ なんだかなあ。

「くしゅつー！ん？」

あ、ヤバっ！ほのかが起きちゃっつっ！！

「なに？ あ、こら、忠太郎！」

あたしは、とっさにふとんかぶっちゃった。向こうの方で、なんだがゴソゴソやってるけど。そのうち静かになって あれ？ なんだろ、ヘンな感じ。

なんか、わきの下？ って、ぷっ！

「うあはははははっ！」

なに？ なにこれ？ ちよっと！？

「くははははははっ！ わきの下、なにやって

ぷっ！

ふとんめくつたら、ほのかの顔がいた。

「ああ、起きちゃった」

「あつたり前でしょっ！！」

ほのかごと、ふとんから起き上がった。あ、ほのかの目がいじわるになってる。

「さっきまで、ひとの顔にいたずらしてたの、だあれ？」

あっちゃあ。やっぱバレてたのか。でも、あれは

さあ

「あたしだけでやってたわけじゃ あれ？」

まっすぐ忠太郎のほう指さした つもりだったけど、いない。

「忠太郎なら、お仕置き中です」

お仕置き？——あ、遠くで犬の音がする。悲しそ

うな、細い声 !?

「ちよ、ちよっとほのか！ あれはあたしも悪いんだから。やめてよ、動物虐待は」

思わず立ち上がろうとしたあたしの腕を、ほのかの手が押さえた。あれっ？ と思って見てみると、ゆっくり首をふってる。

「悪いことしたら10分間ひとりになるの。わたしと

忠太郎の約束よ」

約束？

あたしはあぐらかいて、ほのかの顔を見た。けど、
「もちろん、わたしが悪いことしたら、わたしが10
分間ひとりになるのよ。暗い部屋でね」

ほのかの目、あたしを見てないみたい。

「忠太郎がひとりのときは、わたしもひとり。叱
るときは、わたしも同じだけ耐えなくちゃいけない
の。その代わり、さびしいときはお互いまくら
になつたりしてたのよ？」

苦笑いしてるほのかの顔、なんだかまぶしかった。
そっか。

「さ、10分経ったわ。おいで、忠太郎」

ふすまをあけたとたん、忠太郎が駆け込んできた。
ほのかの両肩に前足置いて、顔をペロペロなめてる。

そつ、忠太郎は別にすこくない、普通の犬なんだ
よ。ただ、ものすごく強い絆があるだけで。

「はいはい。悪いお姉ちゃんにけしかけられても、も

うしないのよ？」

って、ひとが見直してるつてのにつ！

「その『悪いお姉ちゃん』つて、あたしのこと？」

「そ・う・で・す！」

少しイヤミっぽく言ったんだけど、すこく真剣
な顔が近づいてきた。あぐん、あんだけあたしにイ
タズラしといて、そりやないよお。

「はいはい。悪かったわね」

もういいや、あきらめた。忠太郎は、ほのかの特
別なんだもんね。

「それじゃ、もうちよつとくすぐつても、いい？」

「あー、もう。好きなだけやればいいじゃない」

あぐらかいたまま、両手を開いて はあ、もう
なんだつてこんなことを ん？ええっ!?

ぎゅーっ♡

「ちよ、ほの、だからっ」

なに？なに？なによこれっ？広げたつでの下に、

ほのかが抱きついてる!?

「うふふふ。だきまくら〜」

だからあ〜。もう、なんで今日はこうべったべたつて、あれれ? なんか、変。そういえば、忠太郎がいないよ。てっきりまた、割り込んでくると思ったのに?

きよるきよる、あたりを見回したら、ろうかの方にしっぽが見えた。どうせ台風で外の小屋には行けないんだし、いっしょに寝ればいいのに。

迎えに行こうかな、って起き上がるうとしたら、胸がぎゅつと締まった。ほのか、痛いくらいに抱きついてきてるよ。

「ほのか?」

「」

雨の音が静かになってきた。チツ、チツっていう時計の音が、とつても大きく聞こえる。なんだか、部屋がさつきよりずっと広くなった気がする

なんか見られてるような気がして、廊下のほうに

目をやったら、忠太郎がじつと見てる。ほのかじゃなくて、あたしの目を。

あたしは胸に顔つずめてるほのかの頭と、忠太郎の目の間を往復して、なんとなくわかった。忠太郎が、なんて言ってるか

「一日くらい、いいよ。抱きまくらで」

胸のあたりにあったかい息を感じながら、あたしはほのかにふとんかけた。

すずめの声が聞こえる

開けた目に、雨戸の明かりが映った。もう朝かあ。

起き上がったら、おなかのあたりから何かがするつと抜けた。ほのかの手が、離れたんだ。結局、一晚中抱えてたんだね。

あたしは、ほのかにふとんをかけなおしてから、そのまま廊下に出た。

雨戸を一枚開けると、庭が見える。まだ、ちよつと明るくなつただけの庭だけど、芝生についた雨の粒がキラキラして、すつこくきれい。

「ワフー！」

しばらく庭を見てたら、背中の方から声がする。あたしが振り返る前に声の主がわきを抜けて、目の前にちよん、つと座つた。

あたしもしゃがんで、まっすぐ目を見てみた。後ろの庭に負けないくらい、忠太郎の目がキラキラしてる。うん。わかるよ。あんたも同じ思いを持っているんだ、つて

「忠太郎、あんたとは友だちになれるかもね」

あたしはそつと、忠太郎の細い前足に手を伸ばした。

ハグッ

「え!？」

い、いきなり噛みつ　かれたけど、痛くない。ただくわえてるだけみたい。そっか。馴れ合わない

ぞ、つてことね。

あたしは噛まれた指を、忠太郎の口の中できいと曲げてみた。

「そんじゃ、ライバル同士、でいい?」

ゆつくり上下に動かしたら、忠太郎も頭を振つてくれる。

「まくら役争奪戦、か」

ウオン、つて小さくほえた声がつれしそうで、あたしはおもわず微笑んじゃつた。

「簡単には負けないからね♡」

—おしまい—